

成長したマツの横で笑顔を見せる高見さん。直射日光が強すぎて植林に向かない南向き斜面で、畝状に土手を作り水分をためる方法を採用した



黄土の大地に 緑と希望が根を下ろす日を

砂漠化と水不足が深刻な中国・黄土高原。その玄関口に位置する山西省大同市で、緑の地球ネットワークは、環境破壊と貧困の悪循環を断ち切るため、緑の再生に取り組んでいる。

**反日感情が渦巻く中で
無から始めた植林活動**

北京から西へ300キロ。年間降水量400ミリの黄土高原には、保水力を失った土が雨と風に流されてきた「浸食谷」と呼ばれる峡谷が、大地に無数に刻まれている。その昔は都が置かれ、文明が栄えたこの地を荒涼とした風景に変えたのは、木を切り、家畜を放牧し、山を削って畑を耕した人間の営みだった。

高原の玄関口・大同の地で17年間、砂漠化防止に取り組んできたのが、認定NPO法人緑の地球ネットワーク(GEN)事務局長の高見邦雄さんだ。「人の手で壊したものは人の手で回復させよう」と、これまで植えた木は1700万本。乾燥に強い3種類のマツや低木などを植えて水や土の流出を防ぐとともに、漢方薬や化粧品原料として売れるアンズを植えることで人々に現金収入の道を開き、生活を変えた。2004年からの3年間は、JICAの草の根技術協力事業を活用して小学校に果樹園を作り、その収益の一部を教育支援にも充てた。

しかし、高見さんが「これほど大



険しい浸食谷が広がる大地

変な仕事だと分かっていたら、絶対にここで始めなかった」と振り返るほど、GENの活動は苦勞の連続だった。

日中戦争の暗い影が色濃く残るこの地では、人々との関係づくりも、ゼロというよりマイナスからのスタートだった。1992年、一人で村々を回る高見さんを、村人は「日本鬼子(リーベン・クイズ)」と呼び、子どもたちは「打倒日本(ダオ・リーベン)」とうたいながら石を投げつけるまねをした。今こそGENの取り組みに賛同し、共に活動するスタッフの中にも、身内を日本兵に殺された人や、日本人と一

緒に働くことを親戚に猛反対された人がいる。村人と徹底的に話し、真摯に植林に取り組み姿を見てもらうことで、少しずつ信頼を得ていくしかなかった。

活動が本格化してからも試練は続いた。94年に大同の農民や日本人ボランティアと一緒に植えた6万本のアンズ。順調に育っていたにもかかわらず、野ウサギに苗木をかじられ、アブラムシの影響を受け、2年後にはほぼ全滅した。

「人に恵まれた」 日中両国のネットワーク

しかし、「先入観もこだわりもない素人だったからこそ、さまざまな人たちの協力を得られた」と高見さん。GENを支えているのは、日本人専門家や、大同市青年連合会内に設けられたGENの担当部署「緑色地球ネットワーク大同事務所」(その後、大同市総工会に移管)の中国人スタッフなど。「偶然とは思えないほど人に恵まれた」という環境が築いた日中両国のネットワークだ。

大同市南部の霊丘県太行山の山中、約86ヘクタールの自然植物園では、高低差を利用して在来種の植物遷移を観察したり、隣接する地方からも植物を導入し試験栽培を行って

いる。政府が進めるマツ一辺倒の緑化はいったん病害虫が発生すると全滅する恐れがあるため、在来種を中心に多様性のある森林再生のモデルづくりに取り組んでいるのだ。

07年から二度目のJICA A草の根技術協力事業の支援を受けているが、北向き斜面では、3種類のナラやシナノキなどが育ち始めており、確実に植生の多様化が進んでいる。また、ふもとの管理棟の周りでも、スタッフらが土や栽培方法を変えながら育苗試験を行っている。地道な作業の繰り返しだ。

この責任者である李向東さんは元々、地元で農民だった。独学で果樹や植物の知識を学びながら李さんが作ったリンゴ畑を日本人専門家の一人がたまたま見つけ、「この畑は本物。作った人を見つけ出して仲間に入れるべき」と高見さんに勧めたのが縁で、GENのメンバーに加わった。「本当に植物が大好き。植物以外目に入らない、変わったヤツなんです」と目を細める高見さんの信頼は厚い。

帰りの車中、「苦勞の連続だった昔を思うと、仲のいい人たちと今、こうして一緒に木を植えていること



本業は看護師(現在は副院長)ながらボランティア通訳として初期から高見さんを支えてきた王萍さん(右)と、緑色地球ネットワーク大同事務所の二代目所長を務める武春珍さん

が信じられない。どちらが夢か現実か、時々ふっと区別がつかなくなり「ます」と高見さんが笑みを浮かべた。憎しみと悲しみが溢れていた大同で、共に木を植える日中両国の人々。「砂漠化した黄土高原を緑に変えたい」という皆の希望が、苗木と一緒に植えられている。



木の状態を見て回る自然植物園責任者の李さん。寡黙な人柄だが、彼の植物への深い愛情と探究心は人一倍